【戦国BASARA 異聞章】

千羽 折鶴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【戦国BASARA 異聞章】

【Nコード】

N4269V

【作者名】

千羽 折鶴

【あらすじ】

群雄割拠の戦国乱世・・・

これは・・・戦国の世に生きた兵達の物語かもしれない・・・（笑。

武田・上杉・伊達・毛利・長宗我部・織田・豊臣・・・。

軍に所属し、又は所属せず・・・。己が儘に、戦国の世を生きた者たち・・・。

彼らは一体・・・どの様に関わり、如何なる道を辿るのか？

短編形式で気分によってはシリーズ化

(戦国BASARAを舞台にした微原作のオリジナル戦国武将の物語です)

真田 信之の段（前書き）

今回は第二段はこの方になります

エノ尚、政宗達の口調が上手く行きませんでした・・・orz
ではござ・・・。

（服部半蔵の話は改めて此方に書かせて戴きます）

真田 信之の段

幼い頃・・・当時体が弱かった某はよく寝込んで苦しい思いをしたものだ・・・。

熱を出して苦しんでいると・・・
襖が小さく開かれて、子供らしい大きな瞳が心配げに此方を見つめていて

少し発つといなくなり、そこに置かれた不器用な折鶴が某の唯一の励みになった・・・。

もう、長い間会ってはいないあの子・・・某の弟、弁丸いや幸村は元気だろうか？

・
・
・

東軍本拠地

「ん・・・？」

東軍所属、奥州筆頭、伊達政宗は

擦れ違った男に驚くように立ち止まり、政宗は男をすぐさまに呼び

止める様に肩を掴み

「……真田幸村、か？」

最後に疑問符が浮かぶ

居るはずがない（西軍だから）好敵手が何故此処にいるかという疑問と

何処か男の気配は政宗の知る幸村とは何処か違う……。

目の前の男を例えるならば……

真田幸村が猛々しく燃える炎なら目の前の男は……静かに燃え行く炎。

「アンタ……誰だ？」

「……貴殿は、幸村を知っているのをごさるか？」

振り替えた男は幸村と大変よく似ていた。

髪長さも同じぐらいで背丈も同じぐらいだが

服装と瞳の色が違う

服装は赤色の長い羽織に袖が長めの着物

着物の紐は金に近いモノで後ろに結わかれていて

腰に刀を差していて、額の鉢巻はない

そして、男の瞳は赤みが掛かった黒の瞳。

「A、すまねえ。人違いだ……。」

少々困ったように頬を掻きつつも内心では幸村とよく似た男に好奇心と僅かな警戒心が沸く

「いや……問題はござらぬ、それよりも貴殿は幸村の事を存じておいでで?」

「ああ……アイツは俺の最高のRivalだからな……。」

ライバルと同じ喋り方で僅かに親近感が芽生える
何処か楽しげでつい政宗は小さく笑みを浮かべる

ら、い……?と疑問符を浮かべてキョトンとした顔をして幸村似の男はハツと思いついたかの様に

「ポツリ……額の兜の三日月に、隻眼に南蛮語……。」

もしか、かの名高き、伊達政宗公で

「ござるか?」

「YES!で、そう言う……真田幸村似のアンタは……?」

何処か楽しげに言い

幸村似の男は、これは失礼した！と詫びる様に礼をして

「某、真田家が長兄、真田源三郎信之と申す者でございます

源次郎・・・幸村は某の異母兄弟でございます。」

ニコと何処か人懐こそうな笑みを浮かべて幸村似の男、信之は答える

「What?! 兄だと!!!?」

兄でござると信之柔らかな笑みを浮かべてはおうむ返しをするかの
ように言い

笑みを浮かべる、その姿は好敵手が主君を前にした時の様な・・・
そう、何処か忠犬っぽい、あの感じだ・・・。

初めて見るが、あく成る程なぐと自身の中で納得する様に頷く
ふっと、ある疑問が浮かび上がる。

「なら・・・真田幸村は西軍だろ?なんで、敵である東軍側にアン
タは居るんだ?」

「・・・?西軍・・・源次郎が?」

初めて聞いたみたいに少し考える様にして

信之は押し黙るように俯き、僅かに肩を震わせて
さすがにその様子に不思議に思い、政宗が声を掛けようとして

「……Hey? だいじょ、……何ですとおおおお!!!
!???」

顔を上げて、驚愕するかの様に叫び? 鬼声を挙げる。

キーーーーーン!!!と城内に響く驚愕の叫び

幸村が殴り合い時や戦場の時の雄叫びと同じぐらいの声に

突然の出来事に耳を押さえることが出来ず、クラリと立ちくらみす
るかのように膝をつく政宗は

ドドドドドドツ!!!!

「政宗様……!!!!!!ご無事ですか!!!!??」

ザツザツ……と横に滑るかの様に現れたのは主君の危機ある所颯
爽と登場する

ご存知、竜の右目、片倉小十郎。

膝をつく、主君に僅かに眉間に皺を寄せて

サツと近寄り、目の前の男から主君を背に隠す様にして

「てめえ……何処の間者だ……よくも、不意打ちを……ッ。
何やら……勘違いが発生している様だ。」

一方、信之はそんな所ではなかった
ブツブツと呟く様に顎をつかみ険しい顔で

「幸村が・・・西軍・・・幸村が、・・・西軍・・・」(ブツブツ)

「おい、・・・何を言ってるやがる?」

ゴゴゴ・・・少し苛立つように怒気を声に滲ませて
鬼が見える・・・。

「〜!・・・でけえ〜声をいきなり出すんじゃないやねえ・・・。」

頭を押さえつつ、ヨロヨロと立ち上がり

「おい、小十郎・・・そいつは・・・。」
小十郎が何か殺気を放つを感じて止めに入ろうと声を掛けるが・・・。

「ブツブツ)・・・ぐウ・・・がっは!!!!!」

信之は何かを呟き続けていたが、突然口元を押さえて吐血を吐いた。

「はああ……!!!?」

二人の少々情けない声が合さる

「うほっ……うふっうほ……。」

膝をつき、口元を押さえて、尚も吐血をする信之に

「おい！大丈夫か！！！しっかりしろー！！!?」

「一体、何だ？……。（ハッ！ まさか、毒でも飲まされたのか
!!!?）」

さすがにこの現状には焦る奥州主従。

政宗はハッとした様に小十郎を見て

「まさか……小十郎の殺気で……。」

「いや、そんな事は……。」

いや、まさか、まさか……と小十郎は吐血して倒れた相手を見て

「（まさか……あの程度の殺気で……。）」

いや・・・殺気の問題じゃ、無くねえ？その鬼の様な形相が問題じゃね？

むしろ、あの鬼の様な顔で見られれば子供泣くよ？

お年寄りには腰をぬかすよ？

いや、マジで・・・と誰も言わないけどね！！

「とにかく・・・侍医を呼びましょう！！」

「yas！！俺はコイツを見てるから、早く呼んで着てくれ！！」

殺気の性ではないと判断して持医を呼ぶ事に決めた二人は政宗は信之の近くにより

小十郎は呼びに向おうとする、焦る主従の前に、キュイーン！！と空から現れたのは・・・。

「本多忠勝？！」

政宗は思わず声を上げてm突如、現れた忠勝に驚く二人をよそに

「・・・・・・・・。」

目の前に倒れている、信之を見つけて
地面に降り立ち、信之を掌に乗せて

「・・・・・・・・！！！！！！」

ブシュ・・・・・・・・！！！！とまた、空高く飛び上がっていく

「な、おい!!!待ちやがれ!!!」

政宗は吹き飛ばされないように柱に掴みつつ、止めの声を掛けるが、遅し。

本多忠勝と信之は去っていた・・・。

「ちっ・・・小十郎!!!」

少し唾然とするかのように立ち止まっていた小十郎は

「・・・、ハッ!!!」

直ぐに気づき返事を挙げて

「徳川ん所に行くぞ、アイツを・・・あのまんまにしとけねえ。」

好敵手の兄と言うこともあるが突然、吐血した相手をさすがに敵であるかもしれないが心配にはなる

小十郎は、その意図に気づき、かしこまりました、返事をして、二人は徳川家康の下へと急いだ。

・ ・ ・
「ん？信之の奴、また吐血したのか？」
あははは、全くしょうがない奴だな」と慣れた様に朗らかに笑う、
家康をよそに

「Hey!!!徳川、アンタ、アイツの事を知ってるのか？」

小十郎も政宗の横で何処か険しげに家康を見つめている

「アイツは・・・大丈夫なのか？」

「ああ！もちろんだ、何しろ忠勝の義理の息子だしな!!!」

「息子!!!??」

驚愕の事実発覚!!!

驚く二人をよそに、家康は続ける

「信之はな・・・信之の父、昌幸殿が体が弱い事を心配して、
せめて強い嫁を見つけようと言う話になっただらしく、

相談に乗った信玄公からワシが忠勝の娘を紹介して、信之は忠勝
の所に入り婿したんだ

いや、昔は、今より大変だったからな・・・一時はどうなるか心
配したものだ。」

昌幸殿の素晴らしき親子愛に感動したとうんうんと頷き

「今では忠勝と小松殿のお陰で日常的な生活は出来るが

どうも興奮すると吐血癖があつてな・・・困つたもんだがな！！

！」

アハハ八とまた、朗らかな笑みを浮かべて

政宗と小十郎は互いに顔を見合い、はあ・・・と小さく溜息を零したがしようがないことだ

オマケ

政宗「一つ・・・疑問なんだがよ・・・。」

家康「どうした、独眼竜？」

政宗「アイツ、真田幸村が西軍側で知らなかったみたいだが、どうゆう事だ？」

家康「あゝ、多分、それは小松姫が原因かもしれないな・・・。」

政宗「小松姫？・・・先言つてた、真田信之の嫁か？」

家康「ああ、実はな・・・小松姫は普段は大変、穏やかな人柄なんだが・・・

どうも嫉妬すると、何をするか分かつたもんじゃないんだ。

・

忠勝から聞いたんだが・・・

真田幸村の書状も秘密裏に燃やしたりしているみたいで相

談されたんだ……。」「

政宗「A」……。なるほどな。」「

機会があれば続く……。。

真田 信之の段（後書き）

【真田 信之】

年齢は23〜24歳 武器は十文字の槍で属性は炎
性格は大変穏やかで少々熱血だが知的で歴史上の真田幸村に近い人
喋り方は幸村と同じで一人称は某。

父親を真似してさらに幸村が兄を真似したと言う設定

幼い頃、中々外に出れず寂しい思いをしたが弟に不器用な折紙などをもらい癒された

異母兄弟（歴史参照）だが中が大変良くて二人とも軽くブラコン気味。

現在は住む場所は違うが手紙のやり取りも度々している。

体が弱く、病弱だったが、嫁と義理父に鍛えられて

現在は無理をしなければ吐血癖のみとなったが興奮しなければ大丈夫
嫁さん思いで嫁に弱い

そして嫁さんも信之さんにキツイ事を言うがやっぱり好き

嫁さんはどうやら、嫉妬心が強いらしく

度々幸村からの手紙が燃やされたりしてるが、それでも嫁さんが好き
服装は赤色の長い羽織に袖が長めの着物

着物の紐は金に近いモノで後ろに結わかれている

（簡単なイメージ説明でスイマセン！）

次回は幸村視点で書いてみたい……。

では、また？お会いしましょう。

服部 半蔵の段（前書き）

今回は前回、短編で投稿した服部 半蔵です。

内容はあまり、変える必要はなさそうなので・・・。

このままでの短編連載としての投稿となりました。

服部 半蔵の段

・ ・ ・
その者…戦国が生み出した闇…。

その者…人が生み出した修羅なり…… - -。

過去である少年が己に問う

「服部^{はつとり} 半蔵^{はんぞう}と言う存在となった貴方は、何時かは死ぬでも、【服部 半蔵】は永遠と受け継がれる、終わる事はない…【服部 半蔵】ではない、【私^{わたし}】は死んでしまったら…どうなるの？何処にいくの？」

何処か悲しげに何処か責める様に問う。

現在である青年は答える

「【私^{わたし}】などはない…此処に存在するのは【己^{おのれ}】…否【服部 半蔵】と言う存在だ。死ぬことなど…ない、貴様は存在しない…貴様は残骸にすぎぬ…。」

淡々と機械の様な口調で答える。

「…残骸ではないよ…【私】は貴方だ…。」
何処か悲しげに少年は否定する様に言う

「【己】ではない…否、己には【過去】など必要ない…。」
青年は尚も淡々と答える

「違う…違うんだ…」と繰り返す少年
青年は淡々とした様子で【残骸】を見つめる

「己には…何も無い…過去も現在も…
己は…【服部】を守り、伊賀の民を守るだけの道具である…
それ以外に存在理由などはない…。」
機械的に青年は当たり前前のように答える

「ッ……。」

【残骸】は、その言葉に何処か傷ついた様に顔を歪める
青年は尚も表情をかえることもなく、【残骸】を見続ける…。

そして…何時しか少年は闇に飲まれるように溶けていき消える

【服部 半蔵】と呼ばれる存在は無表情に見届け
彼は闇に溶け込むように後にした…。

そつと目を開けば兜の目元の部分から僅かに光が差し込む
僅かに目を細めると自分を探している、今の【服部 半蔵】の主で
ある青年。

「半蔵!!」

青年は太陽の様な笑顔を浮かべて、半蔵に近寄って来る
半蔵は静かに佇んでいた木の上から音もなく、青年の前に降り立ち

「…はい、此処に…。」
機械的に淡々とした口調で半蔵は答える

青年は少し悲しげに半蔵を見て
直ぐに先ほどの笑みを浮かべて
「共に茶をせんか？」

半蔵は機械的に承知と答える

「では、行くか！半蔵！！」

半蔵の腕を掴み、青年否徳川家康は笑顔を浮かべる

「…御意。」

半蔵は一言、答える。

前方を見れば、「……」と此方を待つ本多忠勝が見える

家康は忠勝に「おい！！」と手を振り

忠勝も「……！！」と機械音で答える

半蔵は唯、淡々とした面持ちで家康の後に続く

・
・
・

服部 半蔵…

徳川に仕える忍

彼の忍は…唯一、伝説と並ぶいるモノ…。

服部 半蔵…それは、人が生み出した修羅…。

これは、まだ天下分け目の戦が起きる…半年前の出来事である。
彼が…自分の求めるモノを知るのも、まだ、先の出来事ある…

•
○

服部 半蔵の段（後書き）

『服部 半蔵』

徳川に仕える忍

名は代々一族頭首が襲名するもので血の繋がりと実力などで頭首に選ばれる

そして…一切の感情が過ぎ落とされ、最強の忍として作られる彼もまた、先代達と同じように感情が持っていないが…。

時折、存在に対して自問自答したりする場面もある

どうやら、過去の出来事が関係しているらしい

性格は機械的で常に冷静。

属性は『氷』

武器は二対の忍刀

服装は目深な兜に黒い装束で紅い首巻きが特徴。

（少し服装イメージが風魔に似ている）

半蔵は風魔とよく似ていますが、二人の違いは守るモノがあるかどうかの違いかも知れませんが、当小説の半蔵は道具として生きることが望みながらも人間らしさを持つ家康や三成に色んな意味で複雑な思いを抱いています（ある意味では憧れ）。
そんな半蔵の成長を書いていきたいです。

現段階では信之兄ちゃんはギャグで半蔵さんはシリアスな展開かも。

柴田 勝家の段（前書き）

今回は第三弾、柴田勝家編

少々・・・原作（3）に沿った話を書いてみたいと思います
ゲームは持っていないので台詞集や動画などを参考に書いていきますので

所々、違いはありますので、お許し下さい。

では、恐らくシリーズとなる、柴田勝家編どうぞ・・・。

柴田 勝家の段

クスクス

クスクス

クスクス

クスクス

クスクス

クスクス・・。

『全部・・市のせい・・

みんな、みんな・・死んでしまった・・

様も・・にいさまも・・

全部、全部・・市のせい・・。』

赤い彼岸花が辺りに舞った・・。

・
・
・

暗がりの闇の中・・馬の地面を蹴る音が唯、静かに響く・・。

その馬に跨り、地を駆ける黒い布を纏う男が一人

男は背丈は高く、無駄な筋肉がなく、男らしい体格

髪は後ろに流れるようにして、前髪を少し垂らしている

男の顔は獣の様に鋭い瞳が印象的だ、左目に刀傷が男の凄みを際立
つてている

男の背中には巨大な刀が背負われている。

かつて・・・織田軍に所属し・・・その名を天下に轟かせた武人の
一人・・・

彼もまた・・・鬼と呼ばれ・・・名を柴田 勝家と言う・・・。

織田信長が・・・明智光秀の謀反により落命した後・・・

そのご・・・城に戻り、暗黙を保ってきた・・・。

織田軍でも、名のある武将である彼は今の状況では表立っての行動
が出来なかった。

それから約半年後、豊臣軍の宣戦布告、勝家はこれに向え打つ
。だが織田軍でも強さを誇る勝家でも圧倒的な豊臣の前に破れる・・・

勝家が打たれる寸前、家臣たちは豊臣に下った。

何故ならば・・・彼らの主君である勝家の命令と言う名の願いであ
ったからだ

彼らは、今生最後である、彼の願いに従った

柴田勝家は・・・その日、世間的には死んだ者とされた・・・。

勝家のその後は、何とか豊臣秀吉の致命傷から逃れて、彼は小さな
村にたどり着き

そこを拠点として・・・彼は、一人の人物の行方を探し続けた・・・

彼は何故、豊臣に下らず、地位も名誉も捨てて・・・この現状を選んだのか？

彼は織田信長に仕えたのは、その強さにあこがれたからだ
彼は、強さに憧れた・・・。

実は言うならば、豊臣の思想も彼は嫌いではなかった・・・
だが、彼は、己の信念よりも・・・守りたい者が居た・・・。

今は亡き・・・織田信長の妹・・・彼が生涯唯一と決めた、お市の方・・・。

幼い頃、偶然の出会いだった・・・勝家はそれからずっと・・・お市を想い続けた・・・。

彼は・・・お市が幸せなら・・・たとえ、遠くに行ってしまうても
それで、よかった・・・。だが、彼女は愛しい者を失い、織田に連れ戻されて戦場に向わされた

勝家は・・・この時ほど、己の無力を怨んだ事はない。

勝家は何とかお市を救おうと策を練っていたところ

彼が別の地に出兵していた時に明知光秀の謀反・・・。

それから、行方知らずとなったお市の行方を彼はずっと、捜し続けていた・・・。

今度こそは・・・必ず、最愛の唯一人の彼女を守るために・・・

・ ・ ・
かつての記憶を思い出しつつ
勝家は手に入れた目撃情報の場へと進んでいた

「(お市様・・・。)(」

例え・・・怨まれていようと・・・貴女を今度こそ

「(守ってみせる・・・!)(」

それが・・・全てを捨てた男の生きる唯一の意味・・・。

「ハッ!」

馬をさらに早くさせて、勝家は進み行く・・・。

・ ・

・
・
小さな村であった

今となつては、その姿も無く・・・地獄絵図如き、惨状であった・
。

辺りを包む、重苦しい空気におどろおどろしい・・・闇が辺りに広がっている・・・。

その中心に彼女は居た・・・。

「・・・あかい、あかい・・・真つ赤なお花・・・。」

クスクス

「・・・たくさんの・・・赤い、お花・・・様と同じ・・・。」

「

クスクス

虚ろ気に笑い・・・ぼんやりと言葉を紡ぐ

歌う様に・・・悲しむ様に笑う様に・・・。

中心で膝をつきながら手を伸ばして、その周りを舞う様に黒い手が踊る

「・・・ふふふ・・・みんな、一緒なら・・・こわくないよね？」

」。。

にいさまも。。。みんなも。。

クスクス

クスクス

クスクス

クスクス。。。。

歌うように。。。お市は笑う。。。。

。。。

ヒビーン！！！

今は突如怯えるように地面を蹴り、勝家は素早く降り立つ

」。。。」

馬の怯えは止まらず

「……この先に……。」

僅かに臭う、死の臭い……。

勝家は、馬を木に止めて、その先に進んでいく

たどり着いた現状に……勝家は目を見開いた
数多の骸に生気を感じない辺りの気配……。

「（……全滅か。）」

コツコツ……

進んでいく

コツコツ……。。。

村の中心、近くに……彼女は居た……。

「お市様……。。。」

何処か分かっていたのかの様に・・・彼は彼女の名を呼んだ。

「・・・あなたは・・・だあれ？」

虚ろ気に幼子の様に笑い、彼女は彼を見た。

・ ・ ・

ああ・・・どうしてこのような運命を辿ってしまったのだろうか？

何故・・・あの時・・・彼女を止められれば・・・

姫様・・・お市様・・・貴女を救えたのでしょうか・・・？

柴田 勝家の段（後書き）

【柴田 勝家】

年齢：37歳ぐらい 武器は大きな刀で赤黒い鞘。

性格は真面目で少々、顔が恐いのでよく恐がられるが

面倒見が大変良く、幼い頃の前田慶次に戦い方を教えた方でもある
利家とは古い付き合いで仲がいい

お市の事を仕官した頃に出会って一目惚れして

それ以来一筋なお方、以外にも情熱的な面も

服装は赤と黒の鎧に羽織だが、今回の話では黒いマント。

瞳は黒で獣の様な鋭さがある

髪は後ろに流して（オールバックみたいな感じ）左目を僅かに
隠すように

前髪が垂れている、左目に刀傷があるが失明はしていない。

こんな感じです

私の勝家さんは強さに憧れるが、それよりも大切なものがある情熱
的なお方です

この話はお市ルート赤、緑を軸とした作品です

結末がどうなるのか・・・私自身、楽しみです・・・。

それでは、また、次回、お会いしましょう。

真田 信之の段 二の巻(前書き)

どうも・・・こちらの方に創作意欲が進んでいく
恐るべし、戦国BASARA・・・！

真田 信之の段 二の巻

幼い頃・・・某とは違く落ち着いた雰囲気の兄上に何処か遠さを感じていた

他の者からにも期待されていて・・・

家臣や義母上や父上に愛される兄上に当時の幼い俺は僅かな黒い思いを抱いていた・・・

生まれてから、一度も会った事が会った事がない兄上を一目会いたくて会いに向った

初めて会う兄上は・・・床に伏して、何処か苦しげで諦めているかの様であった・・・。

兄上は、物陰から除いていた俺を見つけて・・・
一瞬、目を見開いて

『君が・・・弁丸かい？私は・・・君の兄だ。』

花が綻ぶ様に穏やかで嬉しげに微笑みだった。

恐らく、この頃からであろう、俺が、某が【兄上】を唯一の兄として認め慕い始めたのは・・・。

東軍にて信之が政宗との衝撃的な出会いを果たして約半日後

この日・・・西軍の名立たる武将達は大阪城にて迎え行く東軍との戦いについての会議があつた

「・・・・・・・・ツ（イライライラ・・・）」

「ヒツヒツ・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。。。」

「・・・・・・・・。。。（オロオロ）」

沈黙する一同

ちなみに上から順に三成、吉継、元就、元親である。

「兄上え〜・・・・・・・・何故でござる・・・・・・・・何故、何故え・・・・・・・・。」

部屋の隅のほうで、お市と比べようがない程に何か暗い幸村が体育座りで呻いていた

幸村から、闇属性ではないのにどんよりとしたモノが漂っているそれを、何とか励まそうと頑張っている幸村の忍、猿飛 佐助。

「大将・・・・・・・・き、きつと、信之様が寝込んでこないだけだよ〜」

信之の旦那が寝込んでこれないのはよくあることでしょうか?」

直ぐ来ると肩を叩いて励ましの言葉をかけるが

「うう・・・だが、半年も!!手紙の返事が来ぬのだぞ!!!」

も、もしや・・・!!あ、兄上は、某の事が疎ましく・・・ッ

!!!!

あ、兄上えええええ!!!!!」

おいおいと男泣きを繰り返す幸村

「(もう、誰か助けてちょうだい!!!!!!)」

佐助の悲痛の叫びは・・・誰にも届かなかった。

ダンッ!!!!

この時、一人の人物の堪忍袋が切れた

「いい加減にしるおお!!真田幸村!!!!」

その様な下らぬことに嘆いていないで、話し合いに参加しないか!!!

いい加減にせねば、斬滅する!!!!」

眉間に皺を寄せて怒りの形相三成は幸村に刀を向ける

「ヒツヒツヒツ……やれ、落ち着け、オチツケ……三成よ」

幸村の様子を何処か愉快気に見ていた吉継は三成をおさめようと声を掛けるが

その声には新たな混乱を待ち望むのは気のせいだろうか？

「真田も……取りあえず、後にして……話に参加しろよな？」

苦笑いを浮かべつつ、元親も幸村を励ます声を掛ける

一方、元就は

「……（ズズー）」

餅を食しつつ、のんきに茶を飲んでいた、我関せずの気構えのようだ

ちなみに、此処にいない、島津と小早川、黒田はと言つと……

「またんかー！ー！！おまさんらー！ー！！！」

「なぜじゃあああああ！！！」

「ひいひいひいひい！！！」

吉継に「あの二人に修行でもつけてやれ」と言われてこの現状であつた。

その近くで

「ああ……!!いいですね……みなさんッ!!!!」

悶えていた（何に？、天海が三人に襲い掛かるのも時間の問題である。

さて、話を元に戻して

三成はズンズンと近づき、幸村の方を掴み上げて

「貴様ッ!!そもそも

西軍でありながらッ!!憎き家康の配下の男と文通をしている
事態も腹正しいと言うのに

貴様の体たらく!!万死に値するッ!!!!ひざまづき秀吉様に
詫びるがいいッ!!!!!!」

ぶつちぎれな三成、まあ、確かに正論である気がする

敵軍と文通で……普通ではありえなくねえ?でも、秀吉関係なく
ね?

「キッ!!!(黙らんか!!!!この愚か者があッ!!!!」

す、すいません!!!(ヒイイイ……ッ!!!!)

は、話を戻し……。

幸村は俯きブルブルと方を震わせて

大将……。石田、真田……。と不安な様子で二人を見る、佐

助と元親。

「フン……家康の配下である本多の入り婿の男……あの様な
情弱な者など……」

早急に死んでしまえばいいものを……。」

嘲るように言い放つ三成
その時である！！

プツン……。」

何かが切れる音……。」

「（あれっ？これてやばくない？）」
佐助だけが次に起こる事態に冷や汗をかいていた

「（まさか、まさか……）」
佐助は嫌な予感を感じていた、昔、信之がまだ、真田に居て武田に
仕えていた頃に

彼の実力に怨んだ武田の家臣が「あの様な軟弱者など、死ねばよい
ものを……。」と言いつつ

それを聞いた怒り狂った幸村の起こした惨状を……。

あの時と同じじゃねえ？と思いつつ佐助が見据えた方向には……

「……………」

背後の漆黒の禍々しいオーラを纏う幸村

佐助の予感は見事的中した。

「…………ツ（何だ、これは!）」

幸村の纏うオーラに驚く三成

えっ？何が起きてんだ？と展開についていけない元親にのんきに茶を啜る、元就と吉継（やはり愉快気に）。

三成の肩をガツシリと掴み、幽鬼の如き幸村

「…………兄上に死ねと?…………許さん、あの素晴らしき兄上を、穏やかで知的で

笑顔が素敵で!!敵であろうとつい情けをかけてしまうが怒ると恐いがそれでも優しく

素晴らしい!!兄上に死ねというのか!!三成殿ツ!!!!」

幸村のネジが外れた模様…………。

「大將はね、小さい頃から信之様をお慕いしていてね、あっ、もちろん兄弟としてだよ?

お館様に会う前はもつとべつたりだったんだけど、最近をよくなつたみたいなんだけどね」

此処最近、直接会ってないせいか…………昔の感じに戻りつつあるんだよね…………

俺様…………どうすればいいのかね?（アハハ…………）」

おまけ

幸村「兄上はお館様と同じように尊敬致す、素晴らしきお方でござる。」

三成「それならば、半兵衛様も秀吉様のお近くで采配を振るう姿は大変、美しい……。」

その後、二人は互いに話し合いがヒートアップして、随分と仲良くなつたそうです。

佐助「大将！石田の旦那も、直すの手伝いなさい！！」

元親「……俺の登場の意味あるのか？」

木槌で釘を打ちつつ、怒る佐助とぼやく元親。

元就「阿呆ばかりよな……。（ズズー）」

吉継「ヒッヒヒ……よきことかな、ヨキコトカナ……。」

変らぬ姿勢の元就と楽しげな三成の様子を何処か微笑ましく見つめる吉継。

今日も、なんやかんやで仲がいい西軍なのでした。

真田 信之の段 二の巻（後書き）

初めまして、今晚は。千羽折鶴と言います。
また、お会いできて嬉しく思います。

兄上様続編となりましたが・・・出てこなくてすみません。
果たして、この作品を皆さんが楽しんでくれたのが・・・気にな
ります。

ゲームを持っていないので伽羅の口調が少々自身がありませんので
感想などでご指摘してくださると嬉しく思います。

果たして兄上様と幸村は小松姫と言う障害を乗り越り切り再会できるの
か？

次回を待つて！と言いたいですが・・・再会できるのは当分先です
ね。

二人の兄弟愛が両軍にどのように関わるのか、こっご期待で。

ちなみにこの作品の幸村は
お館様Ⅱ兄上>佐助な序列

三成に例えると兄上様は半兵衛様のポジションなんです

三成と幸村て何か、この二人てよく似ていると思うのは私だけでし
ょうか？

今回は少々グダグダな感じになってしまいましたが、すみません。
少しずつでもグダグダ感が無くなる様、がんばりませんと・・・。

作品の感想や励まし、指摘などをお待ちしています
それでは次回、お会いしましょう。

服部 半蔵の段 二の巻(前編)(前書き)

地味に書き進めて・・・ここらで一旦挫折・・・。

後編は、また今度で事で・・・。

今回は家康の思いをテーマにして書き進めました・・・。

何か・・・色々と残念な雰囲気・・・。

服部 半蔵の段 二の巻（前編）

タンッ！！

夜の闇の中・・・溶け込む様に闇を疾走する漆黒・・・。

早いと言う訳ではないがまるであたりに溶け込むように男はどんどん先へと進んでいく

目を覆うプレートから僅かに見える瞳は深遠の様に深く、氷の様に凍っている。

木々を揺らさず、気配を全て遮断して・・・。
木々を渡り行く・・・。

トン・・・。

木の上に重力を感じさせずに男は木の枝に降り立った

口元の首巻をずらして地上の敵軍の本陣としている城内を見やる

本陣には何人者兵士が警備をしているが、彼の眼から見れば、好きだらけに等しかった。

風が首巻が風に流されて揺れる・・・。

棒の様に立ちながら漆黒の男は動かずに木の上で時を待つ

男に続くようにその後から数人の黒尽くめの男達が現れる。そう、
彼らは忍だ。

彼らは身軽な格好をしており各々の武器を構えたりして、前方に立
つ漆黒の男の合図を待つ

夜の闇を照らしていた月を雲が覆い隠す

その瞬間、漆黒の男が木の上から弾丸の様に疾走した
続くように男達も続く……。

男は愛用の二対の忍刀、無幻を構えて
僅かに垣間見える月が男の顔を照らす……。

「……服部半蔵、忍びて参る……。」

その瞬間、瞳は獲物を狙うかのようにキラリと輝いた。

バサッ！バサッ！！

襲い掛かる忍達に侍達の恐怖の叫びは飛び立つ鷹の音に掻き消され
た……。

豊臣軍 本陣

僅かにざわめく本陣内では薪を焚いており、辺りを照らす

その中でも緊張につつまれた家臣達の前に

大将、豊臣秀吉と、その軍師、竹中半兵衛は常の表情でその場に居た。

その近くに不安げな顔の徳川家康、石田三成の両名が控えている・

今回の戦は反豊臣軍をあげる大名たちが同盟を組み、戦を仕掛けようとした事から始まる

もう少しで天下まで少しと言う状況で起きた戦に

半兵衛は豊臣に仇名すものに、圧倒的な力と完膚なきまでの制裁を与えようと策を練った。

大将、豊臣秀吉は本陣内におり先鋒として二つの部隊に別れられ

石田三成と大谷吉継の部隊と徳川家康と本多忠勝の部隊。

西と東で双方の部隊からの挟み撃ちとなる。

だが、半兵衛は布石として、相手方の先鋒の要となる城に夜討ちをかける事にした

その、夜討ちの奇襲部隊として、徳川の服部半蔵率いる忍衆が選ばれた。

今回の夜討ちは、それなりの重要なものであり、一介の忍風情に任されるなど

家臣達は不安と緊張が襲うと言つ訳である。

だが、家康の心中は半蔵が必ずやり遂げる自身があるが

「（半兵衛殿は何故・・・半蔵を・・・？）」

半蔵は常に家康の影として一切の感情を見せず暗躍していた

それが半蔵自身の望みである事も関係しているが・・・

故に半蔵の事をする者は徳川でも少なく

半兵衛や秀吉の前にも出た事もないし、本人《半蔵》からはその様な報告も受けていない・・・。

家康は半兵衛の目的が分からず、不安げな顔を浮かべているのだ。

「半蔵・・・。」

目の前に居ない、彼の忍の名前を小さく呟いた

忠勝と出会う、少し前頃に半蔵は自分の護衛として伊賀から雇われた忍だった

当時から忍として、自らを道具として確立していた半蔵。

その氷の様に冷え切っていた瞳に家康は恐怖した

まだ幼さが残る家康にとって未知なる恐怖の存在だった

関わる事を恐れて、最初の中から語らず、半蔵を避けていた。

だが、刺客に襲われたもはや是までかと涙を浮かべて覚悟した自分を誰よりもいち早く駆けつけたのは自分が恐れ避けた半蔵であった
体中に傷跡があり、血も流していたが半蔵を自分を護ってくれた
そして、知った・・・半蔵は常に己の傍で己を護っていた事を。

家康は半蔵を受け入れて、慕い始めたのは、遅くはなかった
親兄弟の思い出が少ない家康にとって半蔵はまるで兄の様だった
半蔵の護衛が終わり、悲しんでいた頃

己の無二の友であり、家臣となる忠勝に出会う

そして、あれからさらに数年が立ち、織田により伊賀の里が滅ぼされ
半蔵を含む生き延びたの伊賀の忍を家康は軍に向い入れた
当時は部下のものに反対されたが、家康は時間を掛けて説得し
なきをえた。

そして数年ぶりに正面を向かい合った、あの日・・・。
半蔵はあの時と同じ表情と瞳で己の前に膝をつき

『我ら伊賀残党を向いいれてくださりました、この恩を我らは決して忘れませぬ』

我ら伊賀残党は・・・この場にて貴方様に忠誠を誓う事を誓います・・・

そして・・・必ずや、天下へと導いて見せます・・・この”服部半蔵”の命に返っても・・・。』

己を見据えて、言い切った半蔵の瞳は真っ直ぐで、だが己の命を無下に扱っている

家康は理解した・・・半蔵は欠けているのだ、人間として大切な何かを

そして、自分自身を持っていないのだ、あの悲しい瞳の理由をこの時、やっと分かった気がした

半蔵にとって、大切なのは伊賀を護る事と自分に対する恩を返す事・・・。

目の前にいる服部半蔵と言う男は服部半蔵である責務を果たす為に存在している

『（これでは・・・悲しすぎるではないか・・・。）』

胸の中に渦巻くのは悲しみとこの戦乱の世に対する憎しみ・・・。

戦いの世が・・・半蔵の様な悲しい存在を生み出したのか・・・
ああ・・・何故、戦いを終える事ができぬ？

終わらぬ乱世・・・幾度も繰り返されるのか・・・このような悲しい事が？

ダメだ・・・これではダメだ、終わらせねばならない・・・この様な悲しい出来事をツ！！

家康の天下に対する夢が確固たる強きものへとなった瞬間だった。

・
・
・
ザワリ・・・

沈黙が包まれた本陣内での突如のざわめき・・・

ハツと遠いあの日の記憶を思い出していた家康を現実へと引き戻したざわめきの方へと目を向けると、そこには黒い忍装束の男達。

数名が膝をつき、一人を残して、その場を後にした

音もなく近づく男の手には髪を掴み血を滴らせた生首が一つ

生首は恐怖に包まれた顔をしており、回りの者達もその壮絶な死に顔をした生首に引きつる声をあげるものや口元を押さえて、込み上げる吐き気に耐える者・・・。

そのたった、一つの生首と・・・それを掴む忍の男の顔・・・。

忍・・・半蔵は何の感情も感じさせない程に無表情で氷属性の婆娑

羅の冷気を纏い現れる

何だ・・・あれは・・・。

顔色、一つ変えずに・・・あのような死顔の生首を、何も感じず・・・。

まるで、もののけの様ではないか・・・。

そっだ、まるで・・・修羅か鬼ではないのか？

耳に聞こえてくる、恐れの声・・・

家康は、半蔵に対する、その声を悲しげに眉を下げて拳を握り締め
て聞いていた

「（黙ってくれ・・・半蔵の事を知らないと言っのに・・・止めて
くれ・・・。）」

半蔵は聞こえる、その声にも何の感情を感じずに

音もなく、秀吉と半兵衛の前に肩膝をつき、地面に頭をつけるようにして

前方に敵軍の大將首を差し出した。

「只今・・・ご命令通り・・・敵軍、岩松城、城主の首、お持ちいたしました・・・。」

何の感情を見せない声で半蔵は適切な言葉を選びぬいて言う。

その姿に秀吉は僅かに関心するように半蔵を見つめ

半兵衛は、何処か満足げに、その様子を見ていた。

服部 半蔵の段 二の巻（前編）（後書き）

今回は全て創作した架空のものです

この戦も戦略も、何とか考えたものですが・・・私の頭ではここら
が限界。

半兵衛らしい、素敵な作戦を考える事が出来ない私を許してくれ・
・o r z

そして、長らく更新できず、すみません・・・

これでも地味に書き進めたが・・・本当に残念な雰囲気・・・無
念。

それに伽羅の台詞が少ない私の作品・・・もう少し会話をさせねば

今度は武将とは別で癖がある伽羅で書きたい・・・
ん、例えば千利休や果心居士だろうか？

まあ・・・気長に更新をお待ち下さい。

感想、リクエストなどものんびりと募集中です。

此処まで、読んでくださった、方々に感謝とまた、会えることを祈
り・・・

ここら辺で・・・。

お知らせ

どうも、【戦国BASARA異聞章】をござんの皆さん。
初めましては今日は、千羽折鶴と言います。

え〜・・・最近、更新が進まないこの頃ですが・・・
以外にもアクセス数が2600を超えていて、内心驚きが隠せてい
ません。

正直に言えば、小説をちゃんと書くのは初めてなので、こんなにも
多くの人が来てくれて事に
感謝感激の言葉でも言い表せない現状です。

そんな方々の為にも小説を書きたいのですが・・・
少々手詰まり状態になったのもありますが、学校や家庭の事情で中
々進まず・・・

なので、アイディアや参考などをしていきたいので
皆さんが見たい武将達を是非とも教えていただきたく思います。

尚、自分はゲームはクロニクルヒーローズしか持っておらず

1・2は大まかに3は台詞集と動画で知っている程度なので
ま、リクエストがあれば原作沿いも頑張りますが

大分オリジナルが入ると思いますので・・・あまり期待しないで頂
きたい。

基本、切ない系、恋愛系、シリアス系、ギャグ系とかは書けますので
簡単な設定なんかも一緒に緒だと助かります。

感想の所に書いてくだされば大丈夫です。

ですが、全ての案を使うとは限らないのでご了承下さい。

では、気長にお待ちしていますのでよろしくお願いしますノ

ちなみに今後の予定としては真田信之は少し更新停止で

主に柴田勝家を中心としたいですが、ちょこちょこ別の伽羅で投稿
すると思います

現在執筆中なのは

- ・ 島津豊久
- ・ 加藤清正
- ・ 越智安成

以上となりますが・・・越智安成を知っている人はいるのやら？

この越智安成は鶴姫の恋人さんらしいです。

果たして、どんな話になるのか自分自身、想像できない・・・(汗

服部半蔵はもしかしたら手直しをするかもしれませんが現状では不明です。

そして上の執筆中の作品もまだ、書いている途中で投稿が出来る作品に昇華できるかも不明・・・。

いやはや・・・何かグダグダで申し訳ないですorz

では、この辺で失礼します。

ご縁があれば、またお会いしましょう・・・。

今後とも感想などはお待ちしておりますノノ

柴田勝家の段 二の巻（前書き）

私は何がしたいんだ・・・？

柴田勝家の段 二の巻

何時だったか・・・もはや、遠い過去の記憶。

彼岸の花が咲き乱れる、赤い花畑の中に佇む少女。

俺はその様子を見守りながら、木の下にて長刀を腕で抱えたまま、その姿を見守る

少女・・・まだ、幼き姫が好きだと言った血の様に赤い花・・・。

人々が恐れる忌名を持つ、その花を姫は何故、好んでいたのか・・・
尋ねると姫は、問いに答えた・・・。

『

』。

まだ・・・これは俺が貴女への恋を自覚する少し前の記憶。

・
・
・

そこには生が存在していった・・・。

もはや、生が存在した証明するのは所々荒れた家々と人形の様に転がる屍のみである

その中には老若男女・・・幼子に赤子までもが転がっている。

それぞれが恐怖に包まれた顔で我が子を守ろうと抱きしめる母の屍
家族を守ろうと盾になるように転がる父と母子の屍

生きようともがく老人や幼子の屍

暴れたり、逃げようとした家畜や鳥・虫けらの屍・・・。

そこにはありとあらゆる死の形が無造作に転がっていた

その在り様は・・・まさに地獄じごく絵図如き惨状であった

その光景が気にすることがなく、互いに見詰め合う男女。

恋人の逢瀬の様に感じるかもしれないが・・・だが。

女の影から湧き上がる様に蠢く黒い手は不気味に空を漂っている・・・。

「ねえ・・・アナタはだあれ？」

黒い手・・・魔手と戯れていた女、お市は首をコテンと傾げて
虚ろ気な瞳で子供の様にぼんやりと問う、

勝家は僅かに震える唇を動かして、言葉を紡ごうとする。

思うように開かない唇にカラカラと渴く咽

言いたい事は沢山あるのに・・・その言葉を口にする資格は果たし
て己にあるのだろうか？

勝家は肩膝をつき、お市に真っ直ぐ見つめる

胸の内で葛藤し続けた末に無意識の内に紡ぎだされた言葉・・・。

「私は・・・貴女をお迎えに参りました・・・。」

「お迎え・・・？」

市は何故？と子供の様な表情で不思議気に呟く。

勝家は僅かに眉間の皺を深めつつも、苦笑いを浮かべて

「はい、私は貴女様を迎えに来ました。」

もう一度、同じ言葉をはつきりとした口調で答える。
その言葉を口にすると同時に勝家は新たに誓う。

貴女を今度こそ守る・・・悲しませない、苦しみへと落ちさせない・・・。
貴女を傷つける者は何であろうと・・・神であろうと・・・
全て・・・俺が殺して殺して・・・殺しつくす・・・俺は・・・貴
女の、お市様を守る鬼となる・・・。

言葉にも胸の内にも語る事が出来ない
己にその資格さえもないのだ、貴女を深い悲しみへと落ちる中・・・
何も出来なかった自分には・・・

『それでも・・・それでも・・・貴女を・・・貴女の笑顔を・・・。』

自身の内に宿る、僅かに隠れた狂気に近い思いに勝家は気づかない
殺す事に対しても、今の勝家には何の趙著もないのだろう。
それが、無力な者であろうとお市の心を傷つける言葉を吐くならば
勝家は、その者の頭蓋を砕き潰すであろう・・・。
今の勝家は壊れた悲しい姫も守る為に存在する鬼と言っても過言で
はない。

自身の隠れた狂気に勝家は気づかない。

それが今の柴田勝家と言う男の存在の意義であり、全てなのだ。

お市は、勝家の様子をぼんやりと焦点の定まらない虚ろ気な瞳で見つめる

数分、いや数刻かもしれない

お市は何処か楽しげに艶やかな笑みを浮かべて

勝家へ這う様にして近づき、頬に手を伸ばす

勝家は僅かに肩を震わせた動揺するがすぐに常の表情に戻り、お市を見つめる

二人の顔が接吻するぐらいに近づき、瞳が交差する……。

「あなたも……市といっしょ……可哀そうに……可哀そうに……

大切なものを守れないで……死ねないで……置いてかれて、寂しいのねえ？

ふふふ……大丈夫よ？市が……あなたを拾ってあげる……

一緒に……いきましょ？かわいいそうな……子鬼さん……

お市は壊れて笑みを浮かべつつ、勝家の首に腕を回して、抱きしめる。

勝家は両膝をついて、驚きつつも受け入れる。

かわいいそうに……かわいいそうに……と耳元で紡がれる言葉

勝家はされるがままに、されてボンヤリと言葉を受け入れる。

お市は同じ言葉を何度も繰り返して

その周りを魔手がクルクル・・・踊るように回りながら二人を包む。

勝家は何処か自嘲するかのようになまなましい笑みを浮かべて、お市の頭をそつと撫でる。

「はい・・・貴女が望むなら・・・。」

勝家は何処か嬉しげに答えた。

『この花は市と同じで・・・皆に気味悪がれてるもの・・・市と同じで・・・。』

貴女は彼岸の花に包まれた花畑で悲しげに笑った。

まだ・・・これは俺が貴女への恋を自覚する少し前の記憶。

柴田勝家の段 二の巻（後書き）

え〜・・・何とか続きを書けました、柴田勝家編、第二話。
何だかシリアスとヤンデレ前回の今回の話・・・
気づいたら、勝家さんがちよいヤンデレ化。

恐るべし！！BASARAにお市様！！

ん〜・・・でもコレは、コレでありだろうか？

果たして、この話にギャグはあるのか・・・いえ、現在は予定無し
なのです。

うわァ〜、このシリアス全開で果たして続くのか？

てか、もはや別連載にした方が分かりやすいような・・・

う〜ん・・・もう少し様子見で・・・。

捏造多数なこんな作品を見てくださった皆さん方に感謝感激を致し
まして

今回はこの辺で・・・では次回をお楽しみに！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4269v/>

【戦国BASARA 異聞章】

2011年11月13日18時51分発行